

## 学校教育における国旗・国歌の位置<sup>†</sup>

中村 清\*

宇都宮大学教育学部\*

日の丸・君が代が国旗・国歌として法制化されて以来、学校の入学式や卒業式で日の丸を掲揚し、君が代を斉唱することが当然と考えられる傾向がある。しかし、これは誤っている。学校教育が国民としての自覚を教えることは必要である。しかし、この自覚は、ともに国旗に敬礼し、ともに国歌を斉唱することによって生まれる感情的一体感とは厳に区別されなければならない。国民としての自覚は、つねに同時に、国民内部の多様性および諸国民の平和的共存の自覚を伴うものでなければならない。それは、異質なものと協調する冷静な理性を必要とする。国旗・国歌は、諸国家を識別するための標識であり、学校教育においてもそのようなものとして教えられべきである。

キーワード：学校教育、教育政策、教育目標、公教育、国旗、国歌

### 1

日の丸・君が代が国旗・国歌として法制化されて以来、学校教育の種々の場面で、また体育祭その他広い意味で教育的な意味をもつ諸行事において、当然のように、日の丸が掲揚され君が代が斉唱される傾向がある。まるで国旗・国歌であれば、教育的行事のなかで使わなければならないかのような風潮である。

政府当局は、学校教育における日の丸・君が代の取扱いが法制化によって変わるものではないと弁じていた。たしかに文部省は、これまでも入学式や卒業式で日の丸を掲揚し君が代を斉唱せよと指導していたのだから、取扱いを変えたつもりはないのであろう。しかし、教育現場における受け取り方は大きく変わった。いままでは日の丸・君が代を学校教育で使ってもよいと消極的に受け入れられていたのに、いまは使

わなければならないと積極的に受け入れられている。少なくとも、これを肯定する人々のあいだでは、そうである。

国旗・国歌の法制化は、これを積極的に学校教育に持ち込もうと考えていた人々の立場を強め、これに批判的な人々の立場を弱めた。批判的な人々は、いまや、入学式や卒業式で日の丸が掲揚され君が代が斉唱されること自体には反対できず、ただ、個人的に日の丸に敬礼せず君が代を斉唱しないことで、自らの思想良心の自由を守っているにすぎない。はたしてこれでいいのか。正式に法制化されれば、また少数の例外者を許容すれば、学校教育においてことあるごとに国旗が掲揚され国歌が斉唱されてよいのか。学校教育に国旗・国歌が持ち込まれるには、それなりの理由がなければならない。しかし、その理由は十分に検討されていない。

入学式や卒業式において国旗を掲揚し国歌を斉唱するのは何のためか。国民としての自覚を高めるためである。はたしてこれは必要なこと

<sup>†</sup> Kiyoshi Nakamura \*: The Place of National Anthem and National Flag in School Education.

\* Faculty of Education, Utsunomiya University.



なのか。望ましいことなのか。もしも学校教育が国民を形成することを第一義的な目的とするのであれば、すなわち人間の一個人としての完成以上に、日本国家という集団に所属する一成員の形成を重視するのであれば、学校教育においてことあるごとに国旗を掲揚し国歌を斉唱して、国民の一員であることを自覚させることが必要であろう。しかし、学校教育が国家の一成員の形成以上に個人としての完成をめざすのであれば、国旗・国歌は不要である。必要だとしても、その使われ方ははるかに限定的でなければならない。

教育基本法は、わが国公教育の目的は人格の完成をめざすことだと規定している。この規定の精神を生かすのであれば、国旗・国歌は安易に学校教育で用いられるべきではない。日の丸・君が代が国旗・国歌として法制化されたか否かは重要な問題ではない。日の丸・君が代であろうと正式な国旗・国歌であろうと、そのようなものが安易に学校教育のなかに持ち込まれること自体が問題なのである。小論は、国旗・国歌が学校教育で占めるべき位置を明らかにすることを試みる。

## 2

これまでも、入学式や卒業式に国旗・国歌を持ち込むことに対する反対論はあった。しかし、それらの反対論には論理的弱点があったのではないか。うえの基本的な問題に入る前に、従来の反対論を検討しておかなければならない。一つは、日の丸・君が代が国旗・国歌としてふさわしくないという反対論であり、他は、日の丸・君が代を強制することは思想良心の自由を侵すという反対論である。

まず第一の反対論について考えよう。なぜ日の丸・君が代は国旗・国歌としてふさわしくな

いというのか。ふさわしくない理由として、国民の十分な合意を得ていないという理由があげられることがある。これは、本質的な理由ではない。合意を得ていないから悪いというのであれば、合意を得ればよいということになる。実際、国会で正常に議決されたのだから、形式的には合意を得たことになっている。それで日の丸・君が代は国旗・国家としてふさわしいものになったというのであろうか。そうではあるまい。

十分な議論がなされていないとか、国会での合意でなく国民全体の合意が必要だという意見がある。議論を尽くせば、あるいは国民投票をすれば、ふさわしい国旗・国歌が生まれるともいうのであろうか。この意見は、議論を尽くせば、日の丸・君が代が国旗・国歌としてふさわしくないという結論が得られるものと期待しているのかもしれない。あるいは議論を尽くせば、たとえ日の丸・君が代を国旗・国歌としてふさわしいという結論が得られても、日の丸・君が代に対する解釈や態度が変わるはずだと期待しているのかもしれない。そのような期待は満たされるかもしれないし、満たされないかもしれない。今日の世論の状況を考えれば、満たされない可能性の方が高いであろう。

国民的合意を得ようとすれば、政治的決定の手続きを経て合意を得るほかない。十分に民主的な手続きがとられれば、よい結論が得られるというわけではあるまい。逆に、結論が変わるまで議論が続けられるときにだけ、民主的な手続きがとられたというのではないか。議論を尽くせ、合意を得よという主張は、それ自体としては、その議論の争点について何ごととも主張していない。議論を尽くすためにも、争点について明確な主張を打ち出さなければならない。日の丸・君が代が国旗・国歌としてふさわしくない理由が述べられなければならない。



日の丸・君が代はなぜ国旗・国歌としてふさわしくないのか。それが戦前の軍国主義日本を象徴するものだからだということであろう。いま、わが国の国内において、日の丸・君が代は過去の悪夢を思い出させるから反対だという人が少なくない。近隣諸国においては、同じ思いをする人はさらに多いであろう。彼らに配慮するならば、さらにまた戦後日本が軍国主義を完全に払拭して生まれ変わったことを内外に示したいのであれば、国旗・国歌を変えるべきである。これが、反対論のいわんとするところである。この反対論には、一理ある。

しかし、いずれにしても国旗・国歌は象徴にすぎない。その象徴にどのような意味をもたせるかは、その象徴をどのように使うかによって決まる。かつて軍隊とともに行進した日の丸が、いまスポーツチームとともに行進している。この状況に慣れ親しんだ若者は、日の丸をわが国スポーツチームの応援旗ぐらいにしか感じていない。それならば、さらに積極的に日の丸を平和主義の象徴として印象づけることも考えられなくはない。たとえば、若者を組織的に海外協力隊として送り出し、その隊の旗として日の丸を携行させてみよ。もしも彼らが海外において真にその地の人々に役立つ仕事をするならば、日の丸は、彼ら自身にとってはもとより、海外の人々にも平和協力の象徴として映るようになるであろう。

問題は、わが国がいま軍国主義を復活させていないか、平和主義を実行しているかということである。いまわが国が平和主義を実行しており、その実行部隊がことあるごとに日の丸を携行していくならば、日の丸は日本の平和主義を象徴するものになるであろう。たとえ日の丸を別の旗に変えても、その旗とともに侵略軍隊が行進するのであれば、その新しい旗が軍国主義の象徴になるだけのことである。何を国旗・国

歌とするかは、それ自体としては、たいして重要な問題ではない。

いま、日の丸・君が代に固執している人々のなかに戦前の日本を維持し続けようと望んでいる人々が含まれていることはたしかである。国旗・国歌を変えることによって、彼らの意見を変えることができるのであれば、国旗・国歌を変えることにも意味がある。しかし、必ずしもそのようにうまくいくとはかぎらない。国旗・国歌を変えることによって、国家政策を転換したかのように見せかけ、実態はたいして変わらないということもありうる。老獪な政府なら、実際そのような政策をとるであろう。そのような術策にはまってはならない。

逆に、日の丸・君が代を維持する方が政策の実質的転換を導く場合もないわけではあるまい。たしかに日の丸・君が代は戦前の軍国主義を象徴している。少なくともそう感じる人々がいる。それにもかかわらず、あえて日の丸・君が代を国旗・国歌として維持し続けるならば、ことあるごとにわが国の過去が軍国主義に染められたことを思い出させられ、それを反省させられるであろう。国旗・国歌を新しくしてしまえば、無理に過去を思い出させられることも少なくなるであろう。

さきに述べたように若者が平和的な協力隊として海外にでる場合を想定してみよ。彼らが新しい国旗を携えていくとき、彼ら自身、自らを戦前軍国主義と結びつけて考えることはなく、また海外の人々もこれら若者を戦前軍国主義と結びつけることは少ないであろう。彼らの心性がほんとうに戦前とは異なって平和主義に徹しているならば、それでよい。しかし、もしも軍国主義の心性が引き継がれていて、彼ら自身それを十分に自覚していないとすれば危険である。彼らは新しい国旗のもとでかつての軍隊と同じことをするであろう。この場合はむしろ、日の



丸を携えていた方がよい。彼ら若者は日の丸に何の感傷ももっていないとしても、海外の人々はそうではない。海外の人々は、何かの機会に日の丸の苦い記憶を若者に伝えるであろう。そうすれば若者は、わが国の過去を思い出さざるをえなくなる。過去の象徴を維持し続けることは、過去の正当化に役立つこともあるが、しかしまた、過去を忘れないための手段としても役立つはずである。

国家の基本的転換を示すために国家の象徴を変えよという議論にも一理ある。しかしまた、国家の過去を忘れないために同じ象徴を維持すべきだという議論にも一理ある。一概にどちらの議論が正しいとはいえない。問題は、象徴にたいして何を期待するかということである。国家の転換を内外に示すために必要であり、かつ有効であるというのであれば、そういう配慮によって国旗・国歌を変えればよい。国家の過去を忘れないために必要であり、かつ有効であるというのであれば、そういう配慮によって古い国旗・国歌を維持し続けられればよい。国旗・国歌は方便である。何を国旗とし、何を国歌とするかはたいして重要な問題ではない。重要なことは、国旗・国歌によって象徴される国家のあり方自体である。

国旗・国歌について十分に議論され、よい国旗・国歌が決められたとしよう。そうすれば、その国旗・国歌は入学式や卒業式で使われてよいのか。うへの議論にしたがうかぎり、もはや反対の理由はなくなる。よい国旗・国歌が定められれば、それを掲揚し斉唱して、国民的自覚を高めよということになる。はたしてそれでよいのか。基本的な問題は、国民的自覚を高めるために国旗や国歌を用いること自体の是非である。うへの反対論は、基本的な問題を無視しているといわなければならない。

次に、日の丸・君が代を強制することは、思想良心の自由を侵すという反対論について検討しよう。はたしてこれは、入学式や卒業式で国旗を掲揚し国歌を斉唱することに対する十分な反対論になっているのか。

教育において思想良心の自由を保障することは、容易ではない。教育とは、基本的に何かを教えようとするものである。その教える内容が思想良心に関係しない事柄なら問題はない。何を教えようと、あるいは教えなくても、思想良心の自由が問題になることはない。しかし、内容が思想良心にかかわるものであれば、それを教えることは、なんらかの程度においてその思想良心を受け入れるように（あるいは教え方によっては拒否するように）作用する。だからそれは、その程度に応じて思想良心の自由を侵すことになる。

たとえば、君が代の歌い方を教えるとしよう。そのためには歌詞の意味を説明し、できるだけ美しく歌う歌い方を教えるであろう。そのように素直に教えれば、そしてその教育が成功すれば、子どもはなにがしか君が代に対する親近感を持つようになるであろう。君が代反対論者からすれば、そのような親近感を植えつけることは思想良心の自由を侵すことになる。だからといって、歌詞の意味を説明するときに、その難点ばかりに注目させ、この歌を嫌いにさせればよいというわけではない。そうすれば、この歌を高く評価している人からすれば、逆の方向で思想良心を侵されることになる。どちらにも傾かない指導法などほとんど不可能である。また、そんなことにばかり配慮しては、まともに歌い方を教えることができないであろう。

君が代をめぐる対立がさほどきびしくなければ、あまりに一方的な指導でないかぎり許され



るであろう。しかし、対立が非常に深刻ならば、どんな指導でも一方に荷担するものとして他方から非難されるであろう。何かを教えるときに、その教え方について完全に中立であることはできない。そのような対立のある問題については何も教えないということも解決にはならない。対立は、たんにどのように教えるかという点にだけあるのではなく、教えるべきか否かという点にもあり、しかも通常は、この対立の方が基本的である。教えないという解決は、教えるべきでないという方に味方することになり、結果的に、教えるべきだと主張する人々を無視していることになる。

教育は、基本的に、教育内容に関して中立ではありえない。君が代を教えるべきか教えるべきでないかが問題になったとき、この両方にたいして完全に中立的な解決はない。教えるか教えないかによって、そして教える場合にはどのように教えるかによって、ある思想良心を支持し、他の思想良心を拒否することになる。教育内容の選択は、このような思想良心の選択を避けて通ることはできない。教育内容が問題になるときに、思想良心の自由を持ち出して強制してはいけないということは、中途半端な議論にとどまる。教えるか教えないか、教える場合にはどのように教えるかについていずれかの思想良心を主張するほかない。

指導はするけれども強制はしないなどということで、中立性が保たれるわけではない。君が代斉唱について、口をこじ開けて歌わせることまではしない、などということがまじめにいられている。まるで強制とは物理的強制だけを意味するかのようである。これはあまりに乱暴な議論である。人間関係において行われる強制は、一般に物理的強制よりも心理的強制の方が多く、またこの方が問題である。物理的に強制しないから強制でないなどということはおよそ無意味

である。子どもを心理的に圧迫して歌わざるをえない状況に追い込むならば、それは強制しているといわなければならない。

教育において強制と指導を区別することはほとんど不可能である。気の弱い子どもにとっては、まわりの子ともと少しでも違うことをするにはたいへんな努力を要する。そんな子どもなら、多くの人が君が代を歌っているだけで、自分も歌うように（心理的に）強制されるであろう。だからといって、このような指導をすべて強制だとして学校から排除することはできない。また排除することが望ましいわけでもない。そんなことをすれば、対立のある問題については何も教えることができなくなるであろう。

君が代を歌うように指導するならば、そして多くの子どもがその指導に素直にしたがって歌うならば、いかに歌うか歌わないかは各自の自由だといったところで、歌う方向に心理的な強制力が働く。強制力が働かないのは、かなり多くの子どもが歌わない場合だけである。しかし、そんな状態であれば、そもそも歌うように指導することができないであろう。歌うように指導するのであれば、ある程度は歌う方向に心理的強制をするのは当然である。それを怖れていては、教育はできない。

皮肉な言い方をすれば、そのような心理的強制があるところで少数の子どもがあえて歌わないことこそ、思想良心の自由を教えることになるということもできる。思想良心の自由を守るということは、基本的に、少数派の思想良心を守ることを意味する。多数派の思想良心ははじめから守られているから、あえて守る必要もない。少数派は、心理的には多数派に同調するように迫られるのが普通である。そのような状況で少数派があえて自らの思想良心を守る場合にのみ、また多数派がそのような異端者を許容する場合にのみ、思想良心の自由は守られる。そ



うだとすれば、ある程度の心理的強制があるところで、その心理的強制に耐える力を育てることが、思想良心の自由を教える教育になるということもできる。

しかし、このようなことは、結果として起こることではあっても、意図的に仕組むべきことではない。思想良心の自由を教えるために、あえて対立する思想良心を教え、少数派が多数派に抵抗する場をつくるべきではない。それはすでに、少数派の思想良心をなんらかの程度侵していることになる。少数派に例外的な身の処し方を認めるのは、その侵害の程度が過度にならないための防御策であるにすぎない。アメリカ合衆国において、個人的に国旗を敬礼しない自由を認めているのは、その例である。個人的に国旗に敬礼しない人は、それで思想良心の自由が十分に守られているわけではない。過度に侵害されていないだけのことである。

思想良心の自由に訴える議論は、特定の思想良心を強制されることに反対することはできても、特定の思想良心自体に反対することはできない。入学式や卒業式に国旗を掲揚し国歌を斉唱することを望む人がいる。しかもその数は少なくない。思想良心の自由に訴えるかぎり、彼ら多数派の希望も容れなければならない。はたしてそれでよいのか。少数派が例外的な処遇を認められれば、それで満足だというのであれば、多数派の思想良心を批判する必要もないであろう。しかし、例外的な処遇で満足できるわけはあるまい。

そもそも、なぜ少数派は例外的な処遇を求めるのか。自らの思想良心が正しいからである。正しいことであれば、強制されてもよい。強制されることに反対するのは、それが悪いことだからである。客観的にはともかく少なくとも私にとって悪いことであればこそ、私はそれを強制されることに反対する。入学式や卒業式で国

旗に敬礼し国歌を斉唱するよう強制することは思想良心の自由を侵すという反対論には、その前提として、入学式や卒業式で国旗に敬礼し国歌を斉唱すること自体が誤っているという反対論がなければならない。たんに強制することが悪いというのではなく、強制しなくてもその事柄自体が誤っているという議論がなければならない。思想良心の自由に訴える議論は、この基本的な問題を避けている。

そもそも国旗・国歌を入学式や卒業式で用いるべき積極的理由があるのか、あるいは逆に、国旗・国歌を入学式や卒業式から排除すべき積極的理由があるのか、これが問われなければならない。これまでの反対論は、この点をあいまいにしている。問題は、学校教育において国旗・国歌はいかなる位置を占めるべきか、それを教えるべきか否か、教えるとすればどのように教えるべきか、という問いである。我々は、この単純な、しかし基本的な問いを問わなければならない。

#### 4

国旗・国歌は学校教育で教えられるべきか。この問いに答えるためには、国旗・国歌を教えることがどういう意味をもつか、これを教えることによって何を目指しているかを問わなければならない。そしてそのためには、そもそも国旗・国歌がどんな意味をもっているか、何のために存在するかを問わなければならない。それゆえにまず、国旗・国歌の存在意義を問おう。

国旗・国歌の存在意義は二様である。第一に、国旗・国歌は、あるものがある国家（または国民、ここでの議論では国家であろうとその構成員全体を示す国民であろうと本質的な違いはない）に所属すること、ある国家の代表であることなどを単純明快な形で示すときに用いられる。



はじめて日の丸が使われたのは、幕末期に外国船からわが国の船舶を区別するためであったという。今日では、オリンピック選手が日の丸を掲げて入場式に臨んでいる。これは、その選手が日本国家の代表であることを示している。さきに述べたように若者の海外協力隊を派遣するならば、彼らもまた、日本国家から派遣されたことを示すために国旗を掲げるであろう。あるいは外国の日本大使館に国旗を翻し、またそうしたければ国連議場のわが国の席に国旗を翻すのがよからう。要するに、個人、団体、場所、船、建物、その他何であれ、それが日本国家に所属するもの、日本国家を代表するものである場合に、そのことを示すために、国旗・国歌を使うことができる。国旗・国歌は、単純な仕方で国家帰属を示すための標識である。

第二に、国旗・国歌は、人々を国民の一員として意識させ、団結させるための手段として用いられる。軍隊において、ことあるごとに国旗を掲揚し国歌を斉唱するのは、そうすることによって、日本国家への帰属意識を確認し、日本国家への忠節の念を想起させるためであった。軍国主義はなやかなりし時代に、軍隊以外のあらゆる場面であらゆる機会を捉えて、国旗を掲揚し国歌を斉唱させたのも同じ効果をねらったからである。学校において、とくに入学式や卒業式などに国旗・国歌が用いられたのも同じ意味をもっていた。

国旗・国歌は二様の意味で使われる。第一に、国旗・国歌は、あるものの国家所属を明確に示すための標識として使われる。第二に、国旗・国歌は、一つの国家に所属する諸個人にその国家の構成員であることを意識させ、国民としての団結心を強めるための手段として使われる。国旗・国歌がもつばら第一の意味だけで使われるのであれば、わが国の国旗・国歌は、外国のそれと明確に区別されさえすれば、何でもよい

ことになる。その場合でも、少しでも格好のよい国旗や国歌がほしいと思うであろう。しかし、それは重要な問題ではない。

しかし、国旗・国歌が第二の意味で使われる場合には、国旗・国歌のデザインや歌詞・メロディなどが重要な問題になる。この場合、国旗・国歌は、人々の感情に訴えるものでなければならない。そのために、その国旗・国歌が何を象徴しているか、何を思い起こさせるかがきわめて重要である。日の丸・君が代に反対する人々は、それがかつての軍国主義的統合を象徴していると思われるから反対するのである。逆に、日の丸・君が代に執着する人々は、それによって過去の日本の延長上にいまの日本があること、いまの日本の繁栄が過去の日本人の遺産としてあることを強調したいからである。ここでは国民統合の原理が問題になり、その原理についての考え方の違いが、異なる国旗・国歌を求めさせることになる。

国旗・国歌が第二の意味で使われるのであれば、このような統合の原理を問う争いが起こることは避けられない。そして国旗・国歌を選ぶことは、必然的にこの原理に関してある種の選択をすることになることも避けられない。実際、日の丸・君が代が国旗・国歌としてふさわしいか否かで対立している人々は、統合の原理に関して対立しているのであって、日の丸・君が代の美学的・音楽的良し悪しで対立しているわけではない（この意味での対立がまったくないわけではないが、さほど重要な対立ではない）。

この対立が無効だとはいえない。結論がどちらに転んでも同じだとはいえない。しかし、入学式や卒業式における国旗・国歌の取扱いを考えるかぎりにおいては、この対立は重要ではないといえる。なぜならば、そもそも入学式や卒業式において国旗・国歌を第二の意味で使うべきではないからである。



何かことあるごとに、とくに何か重大なことがあるごとに、国旗を掲揚し国歌を斉唱することによって、何が期待されているのか。国民的団結心を強めることである。国家所属を判別する必要などまったくにもかかわらず、ことあるごとに国旗・国歌を持ち出すのは、人々に自分は日本国家に所属する国民の一員だということを感じさせ、そうすることによって国民としての感情的一体感を強めるためである。それゆえに、問われるべきことは、いま学校教育においてそのような国民の感情的統合を強める必要があるのかということである。

この問いは、必然的に、国家のあり方についての問いに導かれる。一国家を構成する人々の集団すなわち国民は、そのような感情的一体感によって強固に結ばれた人間集団であるべきか、そうではなく異質な個人や集団を含む多様な人間集団の集まりであるべきか。これが問題である。

国民国家は、国家が同質的な文化を共有する単一の人間集団によって構成されることを理想とした。現実の国家は、この意味での国民国家ではなかった。わが国においても、明治初年にはまだ国家内諸地域間（旧大名間）で武力対立が起こる可能性があった。また、アイヌや琉球のような相当程度に異質な人間集団を含んでいた。明治政府は、これら多様な人間集団を一つの国民に統合することを必要とした。学校で日の丸・君が代を用い、また社会一般でも祝日等に日の丸を掲揚したのはそのためである。人々は、日の丸・君が代によって自分は他ならぬ日本国民の一員であることを自覚させられた。日の丸・君が代はまさに国民統合を促進するための手段であった。国旗・国歌の第二の意味が最大限に利用されたのである。

国民が感情的な一体感によって統合することは、悪いことではない。現在でも国内で武力紛

争が起こっている国は少なくない。それらの国々に比べれば、国内でいかに利害や意見が対立しようとも、それが言論の対立にとどまり、まがりなりにも話し合いによって解決することができるのは大きな幸福である。問題は、しかし、その一体感が国境を越えないところにある。国内ではあらゆる対立を話し合いで解決することに成功している国が、外国に対しては安易に武力による制圧を実行することがある。国際間の紛争は武力によって解決されるのが当然であると考えられることがある。

国民の感情的統合を促進することが誤っているわけではない。国内に分裂の危険がある国では、国旗・国歌によって国民の一体感を育てることが必要であろう。しかし、それが、そしてそれだけが強調されてはならない。国民的統合が強調されすぎると、国内の多様性を無視して、少数派を抑圧することになる。国家間の協調を不可能とみて、力による支配を当然とみるようになる。わが国にとっていま必要なのは、国家を相対化することである。すなわち、国家内に多種多様な人間集団が存在する事実を認めて、国民内部の多様性を許容することであり、さらにまた、国家を越えて理解し合い、助け合う精神を育むことである。

人間各個人は多種多様な集団に属する。国家もその一つである。多種多様な集団は、その成員にたいしてそれぞれに異なる要求を突きつけることがある。一人の個人のなかで異なる集団の要求が対立することがある。その場合、つねに国家の要求が最重視されるべきだとはかぎらない。問題によっては国家よりも小さい地域の要求を重視すべきであり、問題によっては国家を越えた地域連合ないし国家連合の要求を重視すべきである。あるいはまた問題によっては、国家横断的に存在する宗教団体の要求をより重視することがあってもよい。



現状においては、国家はたしかにもっとも重要な人間集団である。人間各個人にもっとも大きな影響を与える集団は国家であるということは、いまでも多くの場合は当たっている。しかし、それが望ましいわけではない。すでに、国家以外の地域連合や国際連合、あるいは諸々の民間団体が国家と同等またはそれ以上に諸個人の生活に影響を与えることがある。将来はさらに与えるようになるであろう。個人は、国家に所属するだけでなく、国家以外の種々の集団にも所属する。どの集団が個人にとって準拠集団となるかは、時と場合によって異なる。国家がつねに最上位の地位を占めるべきではない。

国家がこのような意味で相対化されるためには、国民各個人の国家以外の諸集団への帰属意識が高められなければならない。いままであまりにも国家への統合ばかりが強調されてきた。それゆえにいまは、国家への統合をむしろ弱めて、それ以外の集団への統合を強めることが必要である。国民の感情的統合の象徴として国旗・国歌を使うことはきびしく制限されるべきである。

## 5

以上のような考え方をとるならば、国旗・国歌をいかに扱うかについて一般的な原則がでてくる。第一の原則は、国旗・国歌を国家（または国民）所属を示すための標識として扱うのみで、国民統合を促進する手段としては扱うな、ということである。そして第二の原則は、国旗・国歌を国家以外の諸人間集団を象徴する旗や歌と同等に扱え、ということである。この原則は、一般社会に適用されるべき原則であり、学校教育も例外ではない。以下、主として学校教育に限って具体的方策を示すことにしよう。

すでに触れたように、国旗はもともと船舶の

所属を示すために用いられた。今日でも、同じ目的で国旗や国歌が用いられる。たとえば、外国の日本大使館が日本大使館であることを示すために国旗を掲げ、そこでの行事で国歌を演奏するというようなことである。また、国際的な交流行事で各団体がそれぞれの国籍を示すために国旗や国歌を用いることがありうる。オリンピックの入場行進で選手が国旗をもって歩き、また優勝者を讃えるために国歌を演奏することも、オリンピックが国家対抗競技会であるかぎりは認められる。学校においても、外国児童生徒との交流会をもつときに、それぞれの国旗や国歌を用いて国家間の関係を意識させることがあってよい。

国旗・国歌がうえのような仕方で用いられるならば、子どもはごく素直に国旗・国歌が国家や国民を示す標識であることを知るはずである。そして自分の国家・国民を大切にする気持ちがあれば自分の国旗・国歌を大切にし、相手の国家・国民を大切に思うならば、相手の国旗・国歌を郑重に扱うはずである。もし必要ならば、国旗や国歌に対して一般的に礼儀正しい態度がどのようなものであるかを教ればよい。国旗・国歌がうえのような使われ方をするならば、そして子どもの心に自他の国家や国民を大切に思う気持ちがあるならば、自然に国旗・国歌への礼儀正しい態度が現れるであろう。

注意すべきは、国旗・国歌だけが強調されるべきではなく、また外面的な態度ばかりが強調されるべきではないということである。国旗・国歌を大切にするのは、あくまでも人々が所属する国家や国民を大切にするからである。重要なことは、その所属集団を大切にするということである。人々が所属しているのは、国家だけではない。子どもはそれぞれ自分の学校に所属する。学校対抗試合や学校間交流がある場合には、校旗や校歌が各個人なり集団なりの学校所属を示



すために用いられるであろう。当然、校旗や校歌もまた大切にされなければならない。国旗・国歌だけが特別だという感覚や態度を育ててはならない。

国旗・国歌への礼儀正しい態度は、他者に対する礼儀正しい態度の一例をなすにすぎない。学校教育において教えるべき重要なことは、この他者を配慮する心であり、その心を形で現す態度である。心なき儀礼は無意味であり、国家への配慮だけでは偏狭である。他者を配慮する心が、自然に国旗・国歌を大切に扱う心と態度を生み出すのでなければならない。それはまた、他の種々多様な個人や集団に対する配慮にもつながり、またそれらの集団を象徴する旗や歌、その他のものに対する礼儀正しい態度にもつながるはずである。国旗・国歌だけを例外的に扱うべきではない。

一般的には、国旗・国歌にたいして非礼を働いてはならないということができる。それは、国旗・国歌によって象徴される国家ないし国民にたいして非礼を働いてはならないからである。このことは、しかし、いかなる場合にも国旗・国歌にたいして非礼を働いてはならないということの意味しない。その国旗・国歌で代表される国家なり国民なりを批判するときには、その批判を象徴する行為として国旗・国歌に非礼を働くということはありうる。国旗・国歌に対する非礼は、国家や国民に対する直接的攻撃や暴力よりも洗練された行為だということができる。

たとえば先の大戦で被害を被った諸国の国民が日の丸・君が代は侵略戦争の象徴だから廃棄せよと主張することがある。わが国がこの批判を無視するとき、他国民のなかに日の丸・君が代に対して非礼を働く者ができるかもしれない。これは、日の丸・君が代への批判というよりも日の丸・君が代を維持しているわが国自体への批判である。国旗・国歌への非礼は、その国旗

・国歌で代表される国家ないし国民への批判として行われうることであり、またそのようなものとして理解されるべきである。

同じようなことを日本人自身が行うこともある。日本国民各個人は、市民の一人として国旗・国歌がどのようなものであるべきかについて発言する権利を有する。いま制定されている国旗・国歌が望ましくないと考えるのであれば、そう発言し、また法を破らないかぎりにおいてその考えにしたがって行動することができる。その行動として、たとえば、日の丸に敬礼せず君が代を斉唱しないということがありうる。これはまさしく思想良心の自由の問題である。

以上の考え方にしたがって、入学式や卒業式に、あるいは体育祭その他の学校行事の際に、国旗掲揚や国歌斉唱を行うべきか否かについても答を与えることができる。これらのことは、無用であるだけでなく有害でもあり、即刻やめるべきである。国旗や国歌に対して国際儀礼上適切な態度をとれるように教える必要があるといわれる。たしかにその通りである。しかし、さきに述べた意味で一般的な礼儀正しさをわきまえている人間ならば、適切な態度をとることができるであろう。国際儀礼が事細かに決まっているわけではない。国家代表としてどこかに出かけるのであれば、そのときに慣例にしたがった儀礼を学んでも遅くはない。重大な学校行事のたびに国旗掲揚や国歌斉唱を行うのは、この教育目的をはるかに逸脱している。それは、国家や国民が他のすべての人間集団を越えて特別の意味をもつかのような錯覚を与える。実際、かつて学校行事に国旗・国歌が用いられたのは、そのような錯覚を与えるためであった。ふたたび同じ過ちを侵してはならない。

国家対抗とは関係のないスポーツ大会などで会場を飾るために国旗を持ち出し、厳粛さを演出するために国歌を演奏するなどの愚行もまた



即刻やめるべきである。国家対抗のときには、それは応援旗や応援歌として、また優勝者を讃える手段として用いられてよい。しかし、国家を意識させる必要が何もない大会でむやみに国旗や国歌を持ち出すべきではない。それは無意味であるか、そうでなければ国家意識を植えつけようとしているか、いずれかである。前者であれば、そんな無駄なことはただちにやめるべきであり、後者であれば、そんな逸脱を侵すべきではない。

この点で付言すれば、そもそも国家対抗のスポーツ大会が必要なかが問われるべきである。スポーツに国境がないというのであれば、国家対抗の試合などやめるべきである。オリンピックは、それが国家対抗であるかぎりには廃止すべきである。スポーツ愛好家は、芸術において国家対抗試合がないことを見習うがよい。

同様に、祝日に国旗を掲揚することも無用である。そもそも戦前においては祝日はすべて天皇にとって特別の日であり、それを国家の祝日としていた。つまり、祝日はまさに天皇とその国家を祝うために存在していたのである。その時代には、祝日に国旗を掲揚することは意味があったかもしれない。しかし、戦後、祝日は天皇ないし国家の祝日という性格を失ったはずである。祝日ごとに国民の感情的統合を再確認する必要はない。否、そんなことはすべきでない。国民的統合は、とくにわが国のようにすでに統合が進みすぎるほど進んでいる国においては、自然に生まれるにまかせるべきであって、人為的に強化すべきではない。

郷土愛がそうであるように、祖国愛も自然に生まれるにまかせればよい。異郷にあれば、嫌っていた郷土でも好きになる。郷土はよい郷土であるから愛されるのではなく、ただ郷土であるというだけの理由で愛される。またそのようにして愛されるだけでよい。祖国愛についても

同じである。外国にいれば、誰でも祖国を懐かしく思うものである。祖国もまたよい祖国だから愛されるのではなく、ただ祖国だというだけの理由で愛されればよい。

愛国心を学校教育で意図的に教えようとすれば、自国を他国と比較し、他国以上によい国だと教えたい。国家を美化して教えることによって、国家に対する特別の敬意をもたせようとしがちである。これは、容易に自国至上主義に陥る。愛国心は、自然に起こるにまかせればよい。また自然に起こるようによい国家をつくれればよい。国旗・国歌を国民の感情的統合のために用いることはやめるべきである。

国旗・国歌は二つの意味をもっている。ある国家・国民を他と区別する標識としての意味と、国民を感情的に統合する象徴としての意味である。この二つの意味を完全に切り離すことはできない。標識はたんなる標識にとどまらず、なんらかの感情的意味をもった象徴として機能する。これを完全に阻止することはできない。そうであればこそ、教育においては、可能な限り標識としての国旗・国歌に徹して教えるべきである。そしてまた、それが象徴としてどのように機能してきたか、また機能しうるかを教えるべきである。これは、日の丸・君が代がどのような経緯で国旗・国歌として制定されたか、あるいは機能してきたかを教えることを意味する。適当な教科（社会科、歴史など）のなかで、日の丸・君が代の由来を教えるべきであり、またそれが果たしてきた役割を教えるべきである。さらにまた、各国が国旗や国歌をもっていることの意味を教えるべきである。それは当然、国民国家の過去と現在および未来を教えることにもなるであろう。

要するに、国旗・国歌については、それに感情的に一体化するような教え方ではなく、国家と個人にとって国旗・国歌がどのような意味を



もっていたか、いまもっているか、将来もつべきであるかを教えるべきである。そしてその一環として、わが国の国旗・国歌についても教えるべきであり、日の丸・君が代についても教えるべきである。したがって、国旗・国歌は教科のなかの適当な個所で、知識として教えることが中心にならなければならない。入学式や卒業式などの儀式的ときに、慣例にしたがって安易に用いるべきではない。あるいはまた、儀式を厳粛に感じさせるために用いるべきではない。それは、国家が、そして国家だけが、厳粛な敬意を払う対象であるかのような錯覚を子どもに植えつける可能性がある。このようなことは厳に慎むべきである。

#### 参考文献

この小論を書くために多くの参考文献を利用したけれども、本文中で直接的に引用、参照することはしなかった。そこで、読書案内を含めて最小限の参考文献を紹介することとする。

- (1)佐藤秀夫編『「日の丸」「君が代」と学校』（日本の教育課題第1巻）、東京法令出版、1995年。

日の丸・君が代についての学習指導要領の記述、文部省の指導、それに対する反対論など、学校教育における日の丸・君が代の取扱いをめぐる代表的な議論がまとめられていて、便利である。また、日の丸・君が代の系譜、戦前学校教育での取扱いなどがかなりくわしく集められている。この問題を考えるための基本的資料集として役立つ。

- (2)下村哲夫『学校と国旗・国歌』ぎょうせい、2000年。

国旗・国歌が法制化された後に、学校教

育においてどう扱うかという実践的問題を法解釈を中心にして解説したものであり、思想良心の自由に配慮しつつ、法にしたがって教えるべきものと論じている。現場の教員や管理者に役立つかもしれない。

- (3)田中伸尚『日の丸・君が代の戦後史』、岩波新書、2000年。

- (4)篠沢秀夫『愛国心の探究』、文春新書、1999年。

前者は、日の丸・君が代反対の立場に立って、戦後の日の丸・君が代をめぐる事件を跡づけている。主として日の丸・君が代の象徴的意味と思想良心の自由を論拠にするこれまでの反対論の典型例といえよう。後者は、このような日の丸・君が代反対論を論駁して、素朴で情熱的な国民国家讃美論を展開している。小論の対極に立つ議論である。

- (5)中村清『公教育の原理——教育基本法教育理念——』、東洋館出版社、2000年。

- (6)中村清「国際化時代における愛国心教育の意味」（『宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第18号、1995年所収）。

最後に筆者自身のものを二つあげる。前者は、公教育の原理を論じて、小論の前提を提供するものである。とくに小論の4で簡単に論じた国民国家と公教育の関係についてやや詳しく解説している。後者は、国際化時代における愛国心教育の在り方を論じて、小論の補足となるものである。